

フランスに見る人生のバランス



有浦美美

アルケマ(株)
[600-8815]京都市下京区中堂寺粟田町93 京都
リサーチパーク SCB#3
ディベロップメントエンジニア, 博士(工学).
専門は高分子.
fumi.ariura@arkema.com

www.arkema.com

この「仕事と私事」というコラムは毎号楽しく拝読している。第一線で活躍されている方々が仕事と私生活の間で苦勞されつつも楽しんでおられることが伝わってきて、親近感が湧くことが多い。今回執筆の機会をいただいたのは少し人と変わった経歴をもっているからであろうと勝手に解釈し、僭越ながら私が考えるワークライフバランスを綴らせていただく。

最初に簡単に経歴を紹介すると、九州大学工学府で修士課程までお世話になった後、フランス政府の奨学金を頼りにフランスのボルドー第一大学の博士課程に進学した。ろくにフランス語を話せないのに飛び込んできた私を温かく受け入れていただいたDeffieux先生の下ボルドー大学の高分子科学研究所(LCPO)に4年間お世話になった。本当はドイツに留学するのが夢で教養部ではドイツ語を第一外国語として学んだのだが、奨学金などの関係で全く言葉がわからない隣国フランスに留学する結果となった。ご縁のあるままにあまり後先考えずに選んだ進路であったが、今思うとサイエンスの基礎を築いた地盤で勉強でき、科学に携わる人間として非常に豊かな経験をさせていただいた。どんな環境でもなんとか道を切り開くことができると思えるようになったのもこのときの経験のおかげである。ちなみに、フランス語の習得とともにドイツ語はきれいさっぱり忘れてしまった。

博士号取得後、フランスに本社を置くグローバル化学品メーカー ARKEMAの京都テクニカルセンターで勤務することになり、帰国前に研修のため10カ月間フランス南西部の研究所で勤務した。そこで驚いたのは会社内の女性たちの活躍ぶりであった。研究所という機能と関係があるのかもしれないが、現場スタッフならびにマネージャーそれぞれの半数近くが女性で占められ、そのうえ研究所長はドイツ人女性であった。彼女たちはあらゆる場面において圧倒的な存在感とプロ意識で上司にも堂々と意見を述べ、物事の決定権を握っ

ているように感じた。そこでは男女という性別の違いという壁は感じられず、個々の経験値、長所や性格が重視されていた。一方、帰国すると日本の社会は残念ながらまだまだ男が中心であることを改めて実感させられる。

フランス人のワークライフバランス感覚には当時の私には常識が覆されることだらけであった。多くの人にとって人生の中心はプライベートであり、それを支えるために仕事があるという感覚が強い。したがって仕事のためにプライベートを乱されることは非常にストレスを感じるようだ。ほとんどの人が仕事とは全く異なる趣味をもっており、多忙な職の人でもスポーツ、料理、ダンスや音楽などセミプロ級の腕前の人が多いことには驚かされる。また、家庭では家事や育児は夫婦のものであって、できるほうがするのが当たり前である。管理職の男性社員も育児休暇をとり、毎朝の送迎、買い物などごく自然に家事をシェアしていた。仕事に縛られる人生ではなく、自分の趣味や家庭内の役割分担を大事にすることが正しい人生のバランスであり、ゆくゆくは持続可能な社会につながるという考え方はもっともだと思う。少なくともこの国では「仕事人間」は決して褒め言葉ではないようだった。

もちろんフランスのすべてを手放して賞賛する気はないが、女性の社会進出率(フランスの女性管理職率38.7%、日本は11.1%)、出生率の高さ(仏2.0、日1.4)、出産後の離職率の低さを見ると参考にすべき点が多い。日本でも女性管理職の比率の向上が推進されており、良いことだと思うが、単に数字上の向上だけでなく、男女とも一人一人の人生設計の幅が広がるような改革になることを期待している。

ちなみに、わが家のフランス人夫も例に漏れず、当たり前のようにほとんどの家事をこなしてくれている。女性の社会進出にはまずは男性の家庭進出が必要不可欠だと実感する日々である。